

# 小学校授業と大学授業の協同に基づく「メタ授業」と「メタフィールドワーク」の開発

島津 俊之（和歌山大学教育学部）

三品 英憲（和歌山大学教育学部）

山本 彩朱（和歌山市立藤戸台小学校）

## I 研究の目的

本稿は、和歌山大学クロスカル教育機構教育・地域支援部門地域教育支援室の2019年度「共同研究事業」に採択された研究課題の報告であり、同じ3名による2018年度の研究課題「小大連携に基づく教員養成フィールドワーク授業の開発」（島津ほか 2019）の続編となる。前稿では、研究代表者の島津と共同研究者の三品が和歌山大学教育学部で担当する「小学校社会科基礎論」（前期・水曜・1限）の授業に、共同研究者の山本が和歌山市立藤戸台小学校で担当する第5学年社会科の授業見学（室内授業（インドアワーク）と野外授業（フィールドワーク）の見学）を組み込むことで、大学と小学校の授業にいかなる効果がみられたかを探った。小学校社会科基礎論は本学部の課程認定科目ではないが、初等教育コース初等教育エキスパートプログラムの専門科目（専攻専門）のうち、「初等教育エキスパート科目」における必修科目となっている。社会科の指導に苦手意識をもつ小学校教員は多く、『第5回学習指導基本調査報告書』（Benesse 教育研究開発センター 2011）によれば、社会科の指導を「苦手」または「どちらかという苦手」と回答した小学校教員の割合は併せて53.4%にのぼり、これは全12教科・領域のなかで外国語活動（59.4%）・総合的な学習の時間（57.0%）・音楽（56.2%）に次いで4番目に高い値である。逆に社会科を「現在、力を入れて研究している」と回答した小学校教員の割合は5.5%に留まり、国語（29.5%）や算数（25.0%）に大きく水をあけられている。本学部の初等教育エキスパートプログラムにおいて、小学校社会科基礎論に課せられた役割は重く大きい。

本研究では、小学校社会科基礎論の授業を、小学校授業と大学授業の協同に基づく《メタ授業》と位置付け、そこに《インドアワーク》や《フィールドワーク》に加えて《メタフィールドワーク》を組み込むことで、学生の現場体験と省察を教員養成の起点に位置付ける「帰納的教員養成」（南浦 2012）に寄与することを目的とする。小学校社会科基礎論は《授業に関する授業》、すなわち《メタ授業》の一種に他ならないが（島津ほか 2019）、課程認定科目としての教科教育法などとは異なり、「身近な地域」から「市区町村」を経て「都道府県」へ至るまでの、《地域調査》を伴う《地域学習》に特化した内容としている。これは、小学校新学習指導要領（文部科学省 2018）の主として第3・第4学年の内容に相当するものである。学生の立ち位置を考慮するならば、《メタ授業》としての小学校社会科基礎論は、《インドアワーク》《フィールドワーク》《メタフィールドワーク》の三要素から構成されることになる。ここでの《インドアワーク》とは、大学での講義やディスカッション、学生の模擬授業などをさす。《フィールドワーク》とは、藤戸台小学校における室内授業（小学生にとってのインドアワーク）の見学をさす。そして《メタフィールドワーク》とは、藤戸台小学校が実施する野外授業（小学生にとってのフィールドワーク）の見学をさす。ソーシャルメディアにおけるハッシュタグの如きメタデータから生成する「メタフィールド」でのデータ収集活動も「メタフィールドワーク」と称されるが（Airoldi 2018）、ここでは前稿に倣い、《フィールドワークに関するフィールドワーク》の意味で用いる。教員養成学部の授業に、大学外での授業見学（ここでの《フィールドワーク》）が取り入れられることは珍しくないが、そこに《メタフィールドワーク》をいかに組み込めるかが本研究のカギとなる。以下、Ⅱ章では研究の経過について述べ、Ⅲ章では履修学生の授業評価レポートと小学校授業者の見解を紹介する。これらを踏まえて、Ⅳ章では若干の反省と展望を行う。

## Ⅱ 研究の経過

本研究は前稿と同じく、和歌山大学教育学部における小学校社会科基礎論の授業進行、および和歌山市立藤戸台小学校における5年4組の社会科の授業進行に合わせて実施された。小学校社会科基礎論の履修は2年生以上で、履修者数は初年度の2017年度が1名（2年生）、2018年度が2名（3年生）で、2019年度は7名（2年生4名・3年生3名）に増加した。小学校社会科基礎論は、初等教育エキスパートプログラムの2018年度入学生より必修科目となり、このことが履修者数の増加につながった面もある。藤戸台小学校は和歌山大学教育学部の連携協力校であり、大学に隣接して立地し、比較的短時間での移動が可能である。5年4組は男子18名・女子15名で、山本は1学期の社会科において、「日本の水産業を考えるー加太漁港を通してー」という単元名のもとに、加太漁港への社会見学（フィールドワーク）を含めた全14時間の単元指導計画を立てた。これは、採択教科書（池野ほか 2018）の小単元「水産業のさかんな地域」に準拠し、山本の単元指導計画や採択教科書の内容は、小学校現行学習指導要領の第5学年において、「食料生産に従事している人々の工夫や努力、生産地と消費地を結ぶ運輸などの働き」を「農業や水産業の盛んな地域の具体的事例を通して調べる」（文部科学省 2008）と規定されていることに対応している。山本の最終的な単元指導計画は、第一次が「水

産物と私たちの生活の関わりを知ろう」(4時間)、第二次が「加太漁港へレッツゴー！～漁業を知ろう～」(7時間)、第三次が「日本の食卓から水産物が消える！？～これからの日本の水産業を考える～」(3時間)となり、小学校社会科基礎論では第二次のうち、「加太漁港の見学に行こう」(2時間)の部分を《メタフィールドワーク》の時間に充て、「分かったこと、気づいたことを交流しよう」(1時間)の部分を《フィールドワーク》の時間に充てた。山本は加太漁港の社会見学を活かした授業を「総合的な学習の時間」でも行っており、こちらも《フィールドワーク》の場として活用した。

小学校社会科基礎論では、4月10日の開講日に全体的な授業計画について説明し、その後の4コマ分は導入的な《インドアワーク》に充てた。そこでは、学習指導要領の新旧比較から小学校社会科では《地域調査》の比重が高まっていることや、JAグループ和歌山による第5学年向け社会科副読本『わかやまの農林水産業』(わかやまの農林水産業編集委員会 2018)における加太の扱いについて説明した。また、授業現場への理解を深めるために、藤戸台小学校の公開授業(2019年2月2日、第3学年社会科)のビデオを映写した。

加太漁港での《メタフィールドワーク》は、小学校側と加太漁業協同組合側のスケジュールに合わせる必要があり、社会見学が正規の授業日とは異なる日程(5月24日(金))で行われたため、結果的に履修学生の大半(7名中6名)が参加できなくなる事態が生じた。当日の社会見学は午前中に行われ、和歌山大学前駅と加太駅の間は紀ノ川駅乗換えで南海電車を利用し、加太駅から加太漁港までは徒歩20分余りの行程を往復した。参加者は5年4組児童(33名)、小学校教員(2名)、大学教員(2名)、履修学生(1名)で、漁協の方々に説明や質問対応を行っていただいた。児童たちは漁港や漁業の生きた現場に触れながら様々な《問い》を投げかけ、分かったことや気づいたことをノートに書き留めた(写真1参照)。不参加の履修学生に対する《メタフィールドワーク》の代替として、「加太漁港社会見学(2019.5.24)の報告」と題するA4サイズ1枚のレポートを島津の文責で作成し、翌日に電子メールで送付した。当日の写真画像はソーシャルネットワーキングサービス(SNS)の一つであるLINEを通じて、履修学生全員が閲覧できるようにした。

藤戸台小学校における《フィールドワーク》は、5月29日(水)の1限(8:45～9:30)と6月19日(水)の1～2限(8:45～10:20)に行われた。前者は、加太漁港における児童のフィールドワークの結果を出し合い、漁業者の思いや漁業を取り巻く状況を共有することをめざす授業の見学であり(写真2参照)、履修学生には山本が事前に作成した学習指導案が配付された。後者は、「加太を“食”で楽しもう♪」というテーマで、加太漁港見学时に購入した寒天から寒天ゼリーを調理して食するという授業の見学であり、「総合的な学習の時間」として調理実習室で行われた(写真3参照)。履修学生にとっては、通常の室内授業とは異なる環境で《フィールドワーク》を行う機会が得られることとなった。

これらの《メタフィールドワーク》や《フィールドワーク》を受けて、大学での《インドアワーク》が実施された。6月3日(月)の5限(16:30～)には、授業者の山本を交えて5月29日(水)の授業見学の振り返りが行われ、正規の授業日ではなかったが、幸い履修学生全員が出席して活発な質疑応答がなされた。また履修学生には、5月29日(水)と6月19日(水)の《フィールドワーク》のレポートを課し、6月5日(水)と6月26日(日)はそれらのレポートをもとにディスカッションを行った。その後は履修学生に、日本の水産業に関する学習指導案の作成を課し、模擬授業を行ってもらうこととした。学習指導案の段階的な練り直しを経て、最終授業日である7月31日(水)に、2年生グループ(4名)と3年生グループ(3名)がそれぞれ授業者を決めて模擬授業を行った。学習指導案の单元名は、3年生グループが「日本の水産業を考える～加太漁港を通して～」であり、2年生グループが「未来の水産業を支えるために～加太漁港を通して～」であった。この模擬授業には、児童役として島津が担当する地理学ゼミの4年生(4名)と、三品が担当する世界史ゼミの3年生(3名)および4年生(3名)が参加した。履修学生には、小学校社会科基礎論の授業評価を最終レポートとして課した。本稿は、履修学生に授業評価レポートの掲載許可を得た上で、共同研究者の三品と山本の確認を経て、研究代表者の島津が取りまとめたものである。

### Ⅲ 履修学生の授業評価レポートと小学校授業者の見解

最初に、履修学生による小学校社会科基礎論の授業評価レポートを示す。

■今回の授業を受講した目的は実際に小学校の授業の社会見学に同行することができるという点であった。しかし、日程調整が急だったことで一番の目的であった見学ができなかったことがとても残念だった。この時点でこの講義を受講する意味を少し失ってしまったような気もした。しかし、その見学だけで終わるのではなく、その後の授業を見学することで子どもたちが見学を通してその後の授業でどのようなことを学ぶことができるのか、また、事前の授業を自分たちで予想して模擬授業を考えることで見学ではどのようなことを子どもたちに学んでほしいのかという、見学だけでなく前後の授業のつながりを考えることで単元全体を見通した授業づくりを学ぶことができたところがとてもよかった。また、実際の小学校の先生の指導案を知ることができたり、考えを実際に聞いて学ぶことができたところは今後の授業づくりに参考になることばかりでとても良かった。小学校の予定と私たち大学生の予定を合わせることが難しいことは十分承知しているが、今後より良い学びのためには、授業を受講する前までに見学の予定日を何日か示す、もしくは小学校側の日程も指定ではなく選択できれば良かったと思う。見学に同行できなかったことは残念ではあったが全体を通して小学校社会科について考え方が深まったよい

機会であった。(3年生)

■私にとってこの授業は必修ではなかったが、実際に社会見学の授業を見学できると聞いて面白そうだったので受けた。しかし、見学の日程を知ったのは直前で私はたまたま予定がなかったから行けたが、他の受講者たちは行くことができなかった。この授業の1番のメインはその見学といってもいいのに、それに参加出来ないのは面白くない。小学校側の都合もあるので仕方がないことだが、予め日程を決めておいたり、そもそも見学に行くことを授業の最初に強調して言わなかったりなど、協力してくれている小学校のこともばかりを考えるのではなく、私たち受講者のことも考えてほしい。逆に、加太見学やその後の授業を見ることができると、見学を通して、その次の授業からどのような展開がされていくのかを知ることが出来たり、児童が主体の授業を見たり、先生の工夫を聞いたり出来たので、今後の実習で活かせることをたくさん学べた。よって、この授業が必修科目として扱われることの私の意見としては、実際に小学校に見学に行ったりなど、他の講義では学べないようなことを、この講義では学べるので、必修にしてもいいと感じるが、見学に行く日程をもっと受講者や、小学校の先生と話し合って決めて行く必要があるなと感じた。(3年生)

■できるだけ現場に行きたくて本講義を受講したが、ほかの講義との兼ね合いで最も行きたかった社会見学に行けなかったのが残念だった。教室の授業を見る機会は実習やほかの講義でもよくあるが、児童を連れて外に出る機会はないので、可能ならば数グループに分かれて他の学年やクラスの社会見学に参加出来たらと思った。必修科目になれば人数が増えるので、なおさらグループ分けをしているようなクラスに行くべきだと思う。また、授業の形態は円になったり数人の顔が見られるよう向かい合うなど、学生が意見を発しやすいようにしてはどうかと思う。特に現場に行った後の話し合いはいろんな意見が出ると話し合いが盛り上がるので、「質疑応答」のような形ではなく担任の先生も交えて話し合うのが良いと思う。最後の模擬授業では、授業後の社会科専攻生の意見が代表者のみに向けて言われていたもので、授業を作ったグループ全員に向けて言うよう授業後はみんな前に出て意見をもらうようにすればよいと思った。最後に、ほかの専攻の学生とはほとんど会うことの無い3回生には、グループでの模擬授業は困難であった。(3年生)

■私はこの講義を受講して良かったと思っている。実際に藤戸台小学校に伺い、社会見学の授業を見学させて頂くことで視覚的に学ぶことができ、授業時に行われた工夫だけでなく、教師がどのような意図で授業を計画しているかを具体的に学ぶことができてとてもよかった。授業見学後に行われた協議会は、自分たちが授業を見学させて頂いて疑問に思ったことなど質疑応答して頂いたことで、より一層学びを深められた。授業見学以外の授業時は、教授と私たちが話し合い、意見を深めていくといった授業であったので、お互いの意見を交流したことで思考力も自然と深めていくことができ、主体的に取り組むことができた。この授業は人数が7人と少人数であったが、その分学べることも多く、私は今回参加できなかったが社会見学の場に足を運ぶ機会もあり、将来に役立つとてもいい経験だと感じた。私は将来小学校教師になることを目指しており、この小学校社会科基礎論で学んだことを活かして社会科の授業をつくっていききたい。(2年生)

■この授業は、初めに社会科の新学習指導要領を確認し、それから、小学校社会の授業を見学したり、教材研究をしたりして、最終的にグループに分かれ、模擬授業を行う。この授業が、初等エキスパートプログラムの必修科目になることに関しては、指導案の作成方法や小学校の見学など多様な学びができるので賛成である。しかし、必修になると必然的に受講生が増えると考え。今季は、受講生7人と少なく、授業の組み立てなどスムーズに進んだと考えるが、人数が少なくても、苦戦したのは、小学校の授業参観日である。小学校の授業に合わせつつ、受講生が時間割を合わせることは難しい。その次の授業で、授業の様子や子どもの様子を知ることができたが、体験できたかどうかの違いは大きい。受講生が増えると、予定を合わせることや、授業参観の結果などを全員に交流することはできるのだろうか。私は、小学校と連携して行う授業は、1つの単元の流れを知ることができたし、子どもの着目点などを知ることができたので、小学校と連携しつつ、受講生が参加できる授業の形を考えることが、課題となると考える。(2年生)

■小学校社会科基礎論では、小学校の社会科の授業がどのように構成されているのかを主に学ぶことが出来ました。特に、実際に藤戸台小学校の五年生の社会科の授業を見学させて頂くことは、貴重な経験となりました。学習指導要領や資料など、大学内で紙媒体のものを見て学ぶだけでは、知識を取り入れるだけになってしまいます。知識を取り入れることも大切なことですが、その知識をどのように現場では活かすのかを学ぶことができることは、私たちが将来実際に小学校の現場に立つ時にとても参考になるものだと感じました。実際の先生の子どもに対する発問や子どもが興味を持つような授業構成をすることの大切さを実感することができました。また、自分たちで模擬授業をするという授業は、授業一つ一つに子どもたちに身につけさせたい能力や子どもたちの反応を考えて授業づくりに取り組むことの大切さを学ぶとともに、自分たちの教師としての能力がまだ足りないことを自覚し、理想の教師に近づくためにもっと学んでいこうという意識を持つことができました。この小学校社会科基礎論は、特に小学校の先生になる人にとってはとても大切な講義だと思います。(2年生)

■この授業は、実際に小学校に行き、授業に参加したり、学校の先生のお話を聞いたり、現場を知る機会が多く、とても身になりました。座学だけでは学ぶことができない、教育の実践力や児童との接し方や対応の仕方、授業づくりや進め方の工夫など学ぶことが多くありました。受講生が少人数であるからこそ、1つのことに多くの時間を費やして考えることができた、話し合いをする時間が多く取れたので、自分にはなかった意見や考えを知ることができ、自分の中の学びをより広げることができました。3年生の方と授業を受けることによって、見て学べることが多く、とてもいい経験になりました。模擬授業をした際には、3年生や4年生などの専攻学生の方に児童役をしてもらって、様々なアドバイスをいただいて、授業づくりの大切や大変さ、児童主体の授業にしていくための工夫や授業の中のささいな注意点などたくさんのことを教えていただき、とてもためになりました。この授業を受けて、ひとつ思ったことがあります。授業の前半部分に、実際に小学校の授業を見に行き、そこで山本先生が扱っていた水産業という授業単元に絞って、学生も自分たちで授業を考え、模擬授業をするというものでした。はじめの方に、現場にいき、授業を見たり、山本先生のお話を伺ったりしたので、そのあと自分たちで授業を考えると、山本先生の授業構成にどうしてもひびかれてしまっていて、考えるのがすごく難しく感じました。私的には、先に水産業について、自分たちの力だけで、授業を作ったりしてから、実際に現場に行き授業をみたり、先生のお話を聞いたりした方が、自分が考えたことをさらに発展させることができたり、新しい発見ができたりして良かったかなと思いました。先に模範解答を見てしまったから、そのほかが浮かばないというような状況になってしまいました。全体的に、実際に現場に行き、授業をしたりすることを通して、自分のためになることや学ぶことが多かったので、受けて良かったと思います。ありがとうございました。(2年生)

次いで、小学校授業者＝共同研究者の山本の見解を示す。

■今回、共同研究として進めたのは、大学教員や学生による漁港見学の付き添い、調理実習の見学、授業参観である。漁港見学では、大学教員や学生が同行することで、道々の安全や指導がよりスムーズにできたように感じる。また見学中も、魚や海が怖い児童に付き添ってもらい、安心して見学できるように配慮することができた。大学教員や学生が参加していただくことによるメリットとして一番大きいのは、この「安心安全」の面なのかもしれないと感じた。学級の児童数が多い分、やはり引率の人数も多いほうが配慮も行き届き、担任としては、個々の児童への助言や指導にいきやすくなるといった点が考えられる。漁港見学後は教室で、気づいたこと、分かったことを出し合い、そこから自分たちの考えを話し合った。大学教員と学生には、この漁港見学後の授業を参観していただいた。授業参観後の学生との話し合いでは、単元構成よりも授業内容や学級経営に関する質問がたくさん出された。今、まさに授業について学んでいる学生側の目からみて、どういったところに疑問を感じるのか、興味をもつのかということを感じることができた。発表の仕方や、授業の流れなどについての質問に答える中で、改めて自分が意識しなければいけない点や成果が出ている点に気づくことができた。また、社会科の学習で教材にしていた漁港からの学びの広がりが見えるように、この調理実習を単元構成に組み込んだ。学んだ場所や人、ものにより愛着をもってもらうことが目的である。漁港で購入した寒天を使った寒天ゼリー作りを行い、大学教員と学生にはその様子を見学していただいた。意図を説明したうえで参観してもらったため、調理実習中の児童の様子や教室での学習とのつながりについても感想をいただくことができた。今回、共同研究をしたことで授業に活かせる意見や知識をいただく良い機会となった。一方で、大学側と小学校側との日程がなかなか合わず、共同で授業について話をするというような時間がとりにくかった。児童の見方や授業の展開などについて、大学教員や学生からももっと意見をもらい、交流する場があれば、よりよい授業づくりに役立てていけるのではないかと感じた。

以上、本章では学生の授業評価レポートと小学校授業者の見解を紹介した。上記のレポートや見解からは、本研究の目的に照らしたとき、肯定的評価とともに、いくつかの課題もみえてきた。これを受けて、次章ではまとめにかえて、若干の反省と展望を行うこととしたい。

#### IV 反省と展望

本研究の目的は、小学校授業と大学授業の協同に基づく《メタ授業》としての小学校社会科基礎論に、《インドアワーク》や《フィールドワーク》に加えて《メタフィールドワーク》を組み込み、履修学生の現場体験と省察に基づく教員養成に寄与することをめざすものであった。南浦(2012:54)は、「必ずしも教科を専門にしているわけではない小学校教育を専門にする学生たちに対して、教科の学習指導の重要性を意識化させ、子どもたちに対する学習指導能力を高めしていくことは喫緊の課題」と述べている。この観点からみたとき、本学部の初等教育エキスパートプログラムにおける「初等教育エキスパート科目」は、学生たちに対して、教科の専門性を多少なりとも《踏み込んだ》形で学ぶ場として提供されているといえる。ここでは、次のことが重要になる。つまり《教科の専門性》とは、教科の背後にある学問的知識や技能のみならず、かかる知識や技能を学校教育現場に落とし込むための《コミュニケーション的専門性》を不可分のものとして含む、ということである。この観点から本研究では、小学校社会科基礎論の授業に、藤戸台小学校での



《フィールドワーク》と加太漁港での《メタフィールドワーク》を組み込み、かかる《落とし込み》の現場を学生に体験してもらうことを試みた。社会科の授業づくりが不得意な小学校教員が多いとされるなかで、ましてや第3学年と第4学年を中心とする《地域学習》は、既存の教科書や社会科資料集の利用だけでは対応できないことも多く、個々の教員の授業づくりの力量が他教科にもまして直接的に試される場となってしまう。履修学生には、かかる点についての現場の教員の苦労や苦心からも、多くのことを学んでもらうことを期待した。

この点に関して、履修学生の授業評価レポートからは、5月24日（金）の《メタフィールドワーク》に参加できなかったことへの不満が多くみられた。前年度は複数回の農家見学の機会があり、履修学生も2名と少なかったため、スケジュールの調整は相対的に容易であった（島津ほか 2019）。今回は漁港見学の機会が1回限りであったこと、見学の日程が確定して児童の保護者に配付プリントを通して伝えられたのが5月15日（水）であり、当日が正規の授業日ではなかったことから履修学生の大半が参加できない事態となった。これは大学授業の担当者として率直に反省すべき点であり、今後は日程調整や学生への他授業欠席への対応などに関して、より一層の改善を図ってゆくべきと考える。加えて反省すべきは、次のようなことである。つまり、学校外での野外授業（フィールドワーク）の実施には地域の方々の善意と協力が不可欠であって、その日程は単に大学側の都合や小学校側の都合のみで決まるものではなく、多忙な仕事や日常生活の時間を割いて社会見学に協力いただいている地域の方々の都合が最優先されるという点に関して、履修学生への説明が不足していたということである。小学校学習指導要領の本文では一切触れられていないが、地域の方々の都合と児童の安全の双方に配慮が必要な野外授業の実施は、決して容易なことではなく、現場の教員はスケジュールや行程の調整に苦労することも多い。小学校授業者の山本は、《メタフィールドワーク》の大きなメリットとして、大学教員と学生が同行することで児童の「安心安全」がより一層図られる点を挙げている。こうした教員側の苦労や苦心にも、履修学生の観察眼が向けられるように、指導や説明の仕方を工夫すべきであった。とはいえ、《メタフィールドワーク》に参加した履修学生は、自らの参加体験に率直な肯定的評価を寄せており、当該学生は加太漁港の社会見学の様子を単に観察するというより、むしろ児童と積極的にコミュニケーションを取りつつ、授業現場の生成に直接参与するアクターとして振舞っていた。教室での授業見学、すなわち《フィールドワーク》の次元では、学生の立ち位置は多くの場合単なる《観察者》のそれに留まらざるを得ないが、野外での授業見学、すなわち《メタフィールドワーク》の次元では、学生はむしろ《参与観察者》として、野外授業現場の生成に直接的に参与することになる。このことは、学生が自らの参与体験を省察しつつ教師像を自ら作り上げてゆく「帰納的教員養成」にとって重要と考えられる。また、《フィールドワーク》のみに参加した学生も、その経験に関しては概ね肯定的な評価を与えていた。「座学だけでは学ぶことができない、教育の実践力や児童との接し方や対応の仕方、授業づくりや進め方の工夫など学ぶことが多くありました」といったコメントや、「大学内で紙媒体のものをみて学ぶだけでは、知識を取り入れるだけになってしまいます…その知識をどのように現場では活かすのかを学ぶことができることは、私たちが将来実際に小学校の現場に立つ時にとても参考になるものだと感じました」といったコメントは、《インドアワーク》と《フィールドワーク》の連携に関して、《メタ授業》としての小学校社会科基礎論の試みには一定の意義があったことを物語るものといえよう。

その他の反省点としては、山本が記したように、授業者を交えた授業見学後のディスカッションが6月3日（月）の1回だけに留まり、前年度のように複数の機会をもつことができなかった。教員養成学部の学生は多くの必修科目や教育実習を抱えており、正規の授業時間外での時間確保が難しいという事情がある。今後は、電子メールやLINEなどのコミュニケーション・ツールのより積極的かつ効果的な活用を図ってゆくべきかもしれない。さらに履修学生からは、《インドアワーク》としての指導案の作成や模擬授業を、《フィールドワーク》や《メタフィールドワーク》よりも前に実施する可能性についてのコメントや、模擬授業を含めた《インドアワーク》の運営方法についてのコメントが出された。いずれも貴重なコメントであって、今後の小学校社会科基礎論の《メタ授業改善》に活かしてゆきたいと考える。

## 【引用文献】

- 池野範男ほか 34 名 2018. 『小学社会 5 年 上』 日本文教出版.
- 島津俊之・三品英憲・山本彩朱 2019. 小大連携に基づく教員養成フィールドワーク授業の開発. 和歌山大学クロスカル教育機構教育・地域支援部門・和歌山大学教育学部編『和歌山大学教育学部連携事業 平成 30 年度成果報告書』 60-65.
- 南浦涼介 2012. 「帰納的小学校教員養成」における社会科指導観の特質と課題—2010 年度「教科教育法社会」から—.
- 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 33: 53-62.
- 文部科学省 2008. 『小学校学習指導要領解説 社会編』 東洋館出版社.
- 文部科学省 2018. 『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 社会編』 日本文教出版.
- わかやまの農林水産業編集委員会 2018. 『わかやまの農林水産業 平成 30 年度』.
- Airoidi, M. 2018. Ethnography and the digital fields of social media. *International Journal of Social Research Methodology* 21: 661-673.
- Benesse 教育研究開発センター編 2011. 『第 5 回学習指導基本調査報告書 小学校・中学校版 (研究所報 62)』. [https://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/shidou\\_kihon5/sc\\_hon/pdf/data\\_14.pdf](https://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/shidou_kihon5/sc_hon/pdf/data_14.pdf) (最終閲覧日: 2019 年 12 月 29 日)



写真1 加太漁港での社会見学の光景（和歌山市加太：2019年5月24日 島津撮影）



写真2 社会科の授業の光景（藤戸台小学校・5年4組教室：2019年5月29日 島津撮影）



写真3 「総合的な学習の時間」の授業の光景（藤戸台小学校・調理実習室：2019年6月19日 島津撮影）